

●演習ワークシート

事例 1

症例：花山 清一（はなやま せいいち） 84 歳，男性，元会社役員

家族：妻（79 歳）と二人暮らし。長男（第 1 子）と長女（第 2 子）は市内在住。
身の回りの世話は主に妻と長女が担っていた

生活歴：妻の手作りの料理を食べることや，テレビでスポーツ番組やドラマなどを観ることが楽しみ。
孫の成長を見守ることを生きがいと感じていた。

経過：

- ・ 肺がん末期で，ADL が低下し寝たきりの状態だった。経口摂取が徐々に減り，フルーツとプリン，少しの水分のみとなっていた。
- ・ 発熱と意識混濁で地元の総合病院に救急搬送され，誤嚥性肺炎と診断された。極度の貧血をはじめ栄養状態が悪く，全身状態が悪化している。誤嚥性肺炎で入院するのは 3 度目。
- ・ 病床ではウトウトしていることが多い。

花山さんの病室と廊下で

- 花山さんは，看護師の朝のラウンド時の訪室で開眼すると，看護師に「いつ家に帰れる？」「退院はいつ？」と度々尋ねた。看護師は，「はい，はい。先生に聞いときますね～」と答えた。
- 花山さんを受けもつ看護チームの看護師は，病室を退室した直後に廊下で同僚と立ち話をしました
看護師 A（看護師 B の 2 歳先輩）「花山さん，今の状況わかってるかな？」
看護師 B 「まだ帰れないですね。先生 I.C したんですか？」
看護師 A 「まだかな。でも，説明してもわかんないでしょ」
看護師 B 「ですね。も～，先生に任せときましょう」
看護師 A 「こういう場合，大抵胃ろうになるね」
看護師 B 「そうですね。どうしようもないし。仕方ないですね～」

ナースステーションで

- 主治医は患者に，「花山さん，今は肺炎が治っていないし，栄養状態がよくないのでまだまだ少し入院が必要です。でも，肺炎が治って栄養状態もよくなったら帰れますからね。頑張りましょう」と伝え，退室した。
- 主治医はステーションで師長に，「ああ，師長さん。花山さんの胃ろうの方針について，家族に聞いて」と，指示を出し，そそくさと去っていった。

電話で

- 師長が妻に電話で「花山さんは抗生物質が効いて今少し容態が落ち着いています。点滴ではなく他の形で栄養を取ってもらうことを検討中です。でも，口からお食事すると，また誤嚥性肺炎になる可能性が高いんです。誤嚥性肺炎は繰り返すと治りにくいので，主治医から，今回の入院で胃ろうをするか，家族で相談してもらってほしいと話がありました。どうされるか，一度話し合っておいてくださいますか？」と伝えた。
- 妻は「わかりました。子供たちと相談して，お返事したらよいですか？」と師長に質問したところ，師長は「はい。一度相談していただいて，決まったらまたお電話ください」と伝え電話を切った。

